

愛知教育大学

# 未来共創プラン

2025

未来の教育を共に創る



国立大学法人  
愛知教育大学  
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

新しい形の  
教員養成に挑戦し  
教職の魅力高め、  
未来につなぐ！

「こんな  
学校があったらいい  
なあ」をみんなで考えて  
みようか！

自分が  
明日からできる、  
小さいことからできる  
工夫は何だろう？

相談  
ボックスを作ってみ  
るといいかも！

学校では  
先生以外にも  
たくさんの方が働いて  
いるんだね。

未来共創プラン戦略連携型プロジェクト（戦略3・7・9が協働！）

第2回「こどもまんなかシンポジウム」を開催！

12月13日（土）、令和7年度愛知教育大学未来共創シンポジウム第2回「こどもまんなかシンポジウム—教職と教育支援職の魅力再発見！—」を開催しました。

本シンポジウムは、東海・信州地域で学び、働き、幸せになる未来型社会の実現に向けて、子どもたちと共に学び、成長する教職と教育支援職の魅力を再発見することをテーマに掲げ、「東海・信州 国立大学連携プラットフォーム(C<sup>2</sup>-FRONTS)人口激減期における持続可能な教員養成タスクフォース参加大学」や、本学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結している大学と共同で開催しました。シンポジウムには、小・中・高等学校の児童・生徒、本学の学生・院生および連携協定を締結している共催大学の学生、教職員、保護者など約220人が参加しました。

第1部では、ベネッセ教育総合研究所総括責任者／教育イノベーションセンター長の小村俊平氏、本学の鈴木佳樹教授、鈴木美樹江准教授が、それぞれの立場から教職や教育支援職の魅力について基調提案を行いました。基調提案の後、グループディスカッションで話題とするキーワードや問いを創出し、会場を移して昼食をとりながらランチミーティングを行いました。ランチミーティングでは、小・中・高・大学生が混在するグループをつくり、基調提案の感想を伝え合い、キーワードや問いを基に教職や教育支援職の仕事の在り方について語り合いました。

午後からの第2部では、大学生が中心となって企画したワークショップにグループで参加しました。すごろく遊びなどを通じて、教職や教育支援職の役割を考え、自分の思いや考えを語り、他者の思いや考えを受容することで、仲間の良さを体感する時間となりました。最後に、未来の教育を子どもと社会全体で共

創するために、教育大学や教育学部・教職課程を置く大学が果たすべき役割について、信州大学の三和秀平准教授、静岡大学の藤井基貴准教授が総括コメントを述べ、野田敦敬学長のことばをもって閉会しました。教職と教育支援職の魅力やよりよい未来の教育について深く考えることができたシンポジウムとなりました。

アンケートでは「身近にいる先生たち以外にも、支援職の人がいることを初めて知ったし、魅力を考えることができた（小学生）」「さまざまな学年の人と一緒に考えて話し合うことで、新たな視点が得られる機会がもっと増えるとよいと思う（高校生）」「よりよい未来の教育は、世代関係なくみんなが自分の意見を言えて、さまざまな教育の在り方が受け入れられることだと思った（大学生）」といった意見が寄せられました。

共同開催大学・企業等：

一般社団法人国立大学協会

信州大学・静岡大学

（東海・信州 国立大学連携プラットフォーム(C<sup>2</sup>-FRONTS) 人口激減期における持続可能な教員養成タスクフォース参加大学)

相山女学園大学・愛知東邦大学・愛知淑徳大学・愛知大学・岡崎女子大学・中京大学・東海学園大学・岐阜協立大学・金城学院大学

（「教員養成の高度化に関する連携協定校」）

株式会社ベネッセコーポレーション

### 戦略3「教職の魅力共創プロジェクト」より

「幅広い世代の子どもの声を、未来の教育を創る学生が聞く」という視点から、シンポジウムを考える



すごろくほどの世代でも親しみのあるものなので、良い雰囲気の中で話し合うことができるのではないかと思います。すごろくの項目は、子どもたちから「どんな学校がいいか」「どういふ先生がいたらいいか」ということを、教員になる身として聞いてみたいと思い作りました。今回のシンポジウムで、創意工夫をさせてくれる先生が子どもたちに人気だと感じたので、自分もそうなりたいと思います。



愛知教育大学  
教職大学院  
そでのさん

## 子どもの声を聞くところから始まる教員養成

急速な人口減少、子どもの多様化、そしてICT・AIの急速な進展により、教育現場はこれまでにない変化と複雑な課題に直面しています。こうした状況のもと、東海・信州地域の国公私立大学と連携し、子どもの声を起点に教育のあり方を見つめ直し、教職と教育支援職の魅力や新たな役割を再発見するとともに、未来の教員養成を地域協働で創り出す取り組みを進めています。



### 戦略7「教科横断探究プロジェクト」より

「教科を横断して探究すること、行きたいと思える学校づくり」という視点から、シンポジウムを考える

小学生から大学生までが同じ机を囲み、「理想の学校」について話し合いました。子どもたちが「先生にもっと本音を言える学校がいい」「失敗しても笑われないクラスがいい」と、日常を具体的に語る姿が強く印象に残りました。子どもたちを一面的に見ていた自分に気づかされ、子どもの声を分かったつもりにならずに聞くことの大切さを改めて実感するとともに、将来の教育を考える視点が広がり、自身の価値観を見直す機会となりました。



愛知教育大学  
かわらばやしさん

中京大学  
あおきさん

「国立大学と私立大学が協働して、地域の教育の質を向上する」という視点から、シンポジウムを考える

シンポジウムでは子どもたちが「話し合いの授業がたくさんある」という話を聞かせてくれました。私たちの世代にはなかった教育が現場で実践されていることを実感しました。「学校に直してほしいところはありますか？」という質問では、「もうちょっと校則を変えてほしい」など、改善されているとはいえ課題はまだ残っているのだと感じました。自分が先生になった時にちょっとずつ直していくことで良い学校が出来るのではないかと思います。



## 学長謝辞及び今後の抱負

令和3年3月に策定した「未来共創プラン」は、9つの戦略ごとにプロジェクトチームを立ち上げ、目標達成に向けた取り組みを進めてきました。皆様のご支援とご協力により、5年間にわたり内容を充実させながら実施してきたところです。2025年度は、第2回「こどもまんなかシンポジウム」を核に、戦略3・7・9を統合した取り組みに挑戦しました。当日は、安城市内の小学4年生から6年生、刈谷市内の中学2年生及び3年生、本学附属学校の児童・生徒、大学生・大学院生に加え、7月の本学オープンキャンパスに参加した県内外の高校生も参画し、多様な世代がグループで対話を重ねました。世代の違いを超えて意見が自然に交わされ、互いの考えに真剣に耳を傾ける姿から、本取り組みの意義と大きな可能性を強く実感しました。今後も「子どもの声を聞く」ことを原点に、取り組みを進めてまいります。



写真：第2回「こどもまんなかシンポジウム」より

学長 野田敦敬

# 愛知教育大学 未来共創プランとは？

### 愛知教育大学 未来共創プランとは？

本学のキャッチフレーズとして、「**子どもの声が聞こえるキャンパス**」、「**地域から頼られる大学**」を掲げ、そこに謳う理想の姿を実現すべく、「愛知教育大学中長期ビジョン・目標・戦略」に「**共に未来の教育を創る**」という思いを込め 2021 年 3 月に策定されたものです。

愛知教育大学  
未来共創プラン  
未来の教育を共に創る

### 愛知教育大学 未来共創プランのビジョン

愛知教育大学は、  
**子ども**と共に、  
**学生**と共に、  
**社会**と共に、  
**附属学校園**と共に、  
**未来の教育を創ります。**

『未来の教育』を考える上では、これからの未来を担う子どもたちをはじめとした様々なステークホルダーの声を受けとめ、開かれた大学として共に前進していくことが不可欠であると考え、ビジョンにその方向性を位置づけました。

このビジョンは

1. 子どもを大切にする
  2. 学生を主体的な存在として尊重する
  3. 地域社会、学校、教育委員会とのつながりを大切にする
  4. 附属学校園との連携を一層強化する
  5. 共によりよい教育を創る
- という 5 つの視点から成ります。

### 3つの目標と9つの戦略

「愛知教育大学未来共創プラン」のビジョンの実現に向けて、重点的に取り組む道筋を3つの目標として掲げ、目標を達成するために具体的な行動の方針として9つの戦略を立てました。



## 目標 1

子どもや学生、社会との対話や協働を通して、現代的教育課題の解決に貢献し、より質の高い教員及び教育支援専門職の養成を実現します。



## 戦略 1

大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアとして、実践フィールドと実践プログラムを提供します。  
(子どもキャンパスプロジェクト) …5P

## 戦略 2

教育リソースデータベースを設置し、教育現場の問題解決に貢献する教育のプラットフォームを構築します。  
(教育のプラットフォーム構築プロジェクト) …10P

## 戦略 3

よりよい教育の未来につながる教職の魅力と共に創り出し、発信します。  
(教職の魅力共創プロジェクト) …11P

## 戦略 4

協定校を始めとする海外の教育機関との連携を密にして、グローバル化に対応したプログラムを学部と大学院で整備します。  
(グローバル化推進プロジェクト) …13P

## 目標 2

大学と附属学校園との連携強化を図ることで、より質の高い教員研修を実現します。



## 戦略 5

附属学校園と教職大学院との連携を強化し、教育の実践的研究拠点を構築します。  
(教育の実践的研究拠点構築プロジェクト) …15P

## 戦略 6

教育委員会や教育現場等との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組みます。  
(大学・附属学校園連携推進プロジェクト) …16P

## 目標 3

広域拠点型教員養成系大学としての意義と価値を高めます。



## 戦略 7

教科等横断し、協働的に学び合う次世代型プログラムを開発するとともに、教育効果を客観的に検証する評価システムを構築し、学生の資質向上や大学の授業改善につなげます。  
(教科横断探究プロジェクト) …17P

## 戦略 8

学生・院生・教員・事務職員が対話する場をつくり、学ぶ側(学生・院生)と供給する側(教員・事務職員)が互いの声を聴き合うことで相互理解を深め、教職学の協働・コミュニケーションをより活発にし、よりよい大学づくりにつなげます。  
(教職学協働プロジェクト) …19P

## 戦略 9

国公私立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。  
(大学間ネットワークの構築) …21P



大学及びその周辺地域を「学び」と「遊び」を一体化できるエリアとして、実践フィールドと実践プログラムを提供します。

- 「学び」と「遊び」が一体化したエリアへと転換する。
- 学生・教職員・地域の協働で多様な興味関心を広げる機会を増やす。
- 遠足や校外学習等の新たな目的地としての提案をする。
- 大学に自生している竹を使ったアクティビティーの創出と関連した体験的な教科学習を行う。
- 大学のリソースの再発見と有効活用、課題解決を推進する。

プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 稲垣 匡人 樋口 一成 縄田 亮太 成瀬 麻美 西野 雄一郎 西村 三郎 北川 雅崇 永田 勇生  
樋口 眞二 中川 貴雄 大森 智子

学びと遊びが一体化したエリアへの転換

第8回「あつまれ！子どもキャンパス」を開催しました

11月22日(土)、第8回「あつまれ！子どもキャンパス」を本学で開催しました。小学生414人と幼児53人、大学・附属高等学校から429人(学生・生徒386人と教職員43人)、地域の高校から5人(生徒4人、教員1人)の計901人(保護者の方を除く)が参加しました。開催日当日は高く澄んだような青空となり、赤や黄色に染まった色とりどりの葉が映え、楽しそうな子どもたちの声がキャンパス内に広がりました。

参加した子どもたちからは「ピラミッドを初めて作ったことがうれしい」(04 高く大きく！プログラミングでマイクラの塔を建てよう)、「アイガモが田んぼにいる理由を学べた」(07 ひとりでするもん！Card Games 編)、「しおり作りが楽しかった。お手紙書くのも楽しかった」(15 大切な人に「手紙」と「手作りしおり」をプレゼントしよう!)などの感想が寄せられました。



自分だけのオカリナで曲を吹いちゃうよ！  
(つくってふいてみよう！世界に一つだけのオカリナづくり体験)

プログラムを実施した学生からは、「さまざまな年齢の子どもたちがいて、子どもと大人、子どもと子どものそれぞれの発達段階に応じたかかわりが見られた」「これまで体験したことや学んだことを子どもたちに伝えることができ、かつ子どもたちと一緒に楽しく作ることができた。また、子どもたちに非常に楽しんでもらえた」「自分が小学生だった頃の記憶は主観的な認識しかできず、実際の小学生がどのような人間なのかを今大学生として観察できた」などの感想がありました。



初めての楽器！音が鳴るかな？  
(一緒に演奏しよう！楽器で繋がる音楽の仲間！)

また、教職員からは「学生間で交流しながら、「教える」という視点で応急手当をどう取り扱うか、子ども視点にたったプログラム作りを通して学生の成長がみられた」などの感想がありました。

◆第8回「あつまれ！子どもキャンパス」実施プログラム◆

【午前の部】

- 1 つくって食べよう！オリジナルおはぎ☆
- 2 つくってふいてみよう！世界に一つだけのオカリナづくり体験
- 3 ゲームでゴーゴー！算数クラブ2☆
- 4 高く大きく！プログラミングでマイクラの塔を建てよう
- 5 micro:bitの無線通信で遊ぼう！
- 6 キミも防災マスター！～Let's ローリングストック～
- 7 ひとりでするもん！Card Games 編
- 8 愛教大の馬にのってみよう！
- 9 切ってつなげるバンブーロード～第4章～
- 10 はじめてのソフトテニス2025
- 11 3つの遊びを楽しめる！愛教遊びパーク★
- 12 わくわくシアター～創作ミュージカル！！～

【午後の部】

- 13 つくって食べよう！オリジナルおはぎ☆
- 14 つくってふいてみよう！世界に一つだけのオカリナづくり体験
- 15 大切な人に「手紙」と「手作りしおり」をプレゼントしよう！
- 16 フィルムで体験「ココロを保存」
- 17 micro:bitで身近な道具のプログラミングを学ぼう
- 18 光の力で切って作る！自分だけのオリジナルパズルづくり
- 19 ひとりでするもん！Sewing 編
- 20 ひとりでするもん！Cooking 編
- 21 電動車いすサッカー体験
- 22 今日から君も子ども救命士！
- 23 一緒に演奏しよう！楽器で繋がる音楽の仲間！
- 24 走って、跳んで、くぐり抜け！障害物競走でタイムを競おう！
- 25 アロマとおひるねでリラックス&リフレッシュ！
- 26 オリジナル竹灯籠をつくろう！
- 27 竹チップでカブトムシを育てよう！～冬の幼虫探し～
- 28 リズムに乗って楽しく体を動かそう！
- 29 おめでとう！ぼくもわたしも絵本の主人公！

【出入り自由の部】

- 30 よみっこ読み聞かせ祭 in Autumn

【一日通しの部】

- 31 みんなの秘密基地を作ろう！
- 32 ガラスを使ってキラキラサンキャッチャーを作ろう！！





check it out!!

学生広報スタッフ  
による取材の様子  
はコチラ (note)



### 卒業生や修了生と協働して「ことことキャラバン 2025 in 刈谷」を開催しました

2003年に当時の学部学生や大学院修了生数人と、本学教員1人が立ち上げて現在に至るまで造形領域の教育や研究の活動を続けている研究会「ものづくり教育会議」が、9月21日(日)、「子どもキャンパスプロジェクト」の取り組みの一つとして、第一共通棟にて「ことことキャラバン 2025 in 刈谷」を開催しました。



完成したおもちゃで遊ぶ子どもたち

「ものづくり教育会議」の会員の多くは本学の学部卒業生や大学院修了生のほとんどが、現在県内の大学や短大で教員をしています。「ことことキャラバン 2025 in 刈谷」の5つのワークショップ



子どもたちのサポートをする大学生



イベントのチラシ

のうち、3つは大学や短大で教員をしている会員と彼らがそれぞれの大学や短大で指導している学生たちが講師となって実施しました。

当日は5つの教室に延べ500人もの子どもたちが集まり、保冷材に色をつけてグラデーションを作る体験や、毛糸や紙に描いた絵によるパッチ作り、消しゴムハンコやカラフルな紐で作るオリジナル紙バッグ、色鉛筆やアクリル絵の具を使ったプラ版キーホルダー作り、凧糸を左右に引っ張ると本体が上にあがっていくおもちゃ作りなど、いろいろなものづくりを体験しました。

### 「走って、跳んで、くぐり抜け！障害物をクリアして最速でゴールを目指せ！」を開催しました

6月15日(日)および6月29日(日)に、本学キャンパス内でイベント「走って、跳んで、くぐり抜け！障害物をクリアして最速でゴールを目指せ！」を開催しました。近隣の子どもたち33人とその保護者28人の合計61人が参加しました。

当イベントは、3月に刈谷ハイウェイオアシスで行われた「あつまれ！子どもキャンパス in 刈谷ハイウェイオアシス」にて行なわれたプログラム「走って、跳んで、くぐり抜け！タイムを競おう！」を小学校高学年向けにアレンジしたものです。

参加者は、第一体育館に集合し、障害物競争を素早く走り抜けるための練習や、ボールを強く遠くに投げるための練習をしました。

その後、参加者を2チームに分け、チーム対抗の障害物リレーを行いました。イベント終了後も、親子で、障害物競争に取り組んだり、キャッチボールをしたりと、楽しそうに運動に取り組んでいた様子が印象的でした。



最速で走り抜けるぞ〜！

### 附属高等学校や刈谷市立くすのき園と協働して「水泳教室」を実施しました

8月22、26日に、刈谷市洲原温水プールにて大学生と附属高等学校の生徒が連携し、刈谷市立くすのき園の利用者(延べ8人)の方に向けて水泳教室を実施しました。

高校生(2人)は総合の授業で探究活動(附高ゼミ)を行っている一環で、将来、特別支援学校の教員になるために、利用者の方へどう支援したらよいかを学ぶことができました。大学生(1人)は将来、高校教員(保健体育)を目指しており、高校生と活動を共に行うことで、生徒の様子やコミュニケーションの取り方などを学ぶことができました。高校生、大学生にとって将来の選択肢の幅を広げる交流となりました。



洲原温水プール(外観)

高校生からは「準備段階では、利用者さんと会話を通してプールでの活動を行うと思っていました。実際は泳いだり、一緒に水泳を行うことが一番利用者さんにとっても

楽しいのだということがわかり、共に体を動かしながらコミュニケーションを取ることが大切だと感じました。また、じっとしているより動いていた方が楽しそうだったので、とにかくいろいろ試してみても好きな事やできることを探すのが大事だと思いました。将来は特別支援学級の先生になりたいと思っているので、児童一人一人にあった活動や、その子のやれる事を増やせるよう学びを深めていこうと思います。」という感想が寄せられました。また、大学生からは「高校生と話す機会を設けていただき、コミュニケーションの方法や実際の様子を知ることができました。私自身、高校教員を目指しており、自身の夢のためにとっても有意義な時間を過ごすことができました。プールの時間では、くすのき園の利用者の方が、どのようなことができるのか、考えながら活動を行いました。利用者の皆様がとても楽しそうに活動を行っていて、私自身も共に楽しみながら活動を行うことができました。ここで得た経験を、社会に出た際に生かしていきたいと思っています。」という感想が寄せられました。





## 遠足や校外学習等の新たな目的地としての提案をする

check it out!!



### 井ヶ谷幼稚園の園児がどんぐり拾いのため来訪しました

10月29日(水)、井ヶ谷幼稚園の園児によるどんぐり拾いを本学キャンパス内で実施し、4歳児35人と5歳児39人、引率教諭10人、大学からは学生2人の合計86人が参加しました。

園児たちは、正門でボランティア学生や職員に迎えられ、附属図書館南側に向かいました。出迎えた野田敦敬学長に元気にあいさつをした後、4歳児と5歳児で別れてどんぐりや葉っぱなどを探しはじめました。



見てみて！赤ちゃんどんぐりたくさん見つけたよ！



だーるーまーさーんーがー... 転んだ!!!

園児たちはまだまだ小さい赤ちゃんどんぐりやふさふさの帽子をかぶったどんぐりなどを見つけると、「先生！かわいいやつ見つけたー!」「おもしろいキノコがあったよー!」などと楽しそうに学生や引率教諭に報告していました。

どんぐり拾いが終わると、坂道で「だるまさんが転んだ」や、養護・幼児棟の南側の芝生で転がって遊んだりしました。参加した学生からは「たくさんの園児たちと遊べて楽しかったです」「みんなとたくさんどんぐりを拾えてうれしかった」などの感想が寄せられました。

### 桑名高等学校の高校生を迎え入れ「ダンス教室」を開催しました

11月9日(日)、三重県立桑名高等学校の高校生を迎え入れ、「ダンス教室」を開催いたしました。体育館附属棟で開催し、高校生32人、大学生15人の合計47人が参加しました。

高校生と大学生がペアとなり、コミュニケーションをとりながら体ほぐしを行ったり、多様な動きに挑戦したりしました。人と人がかかわるようなコンタクトの動きにも挑戦し、新しい動きを発見するきっかけづくりをすることができました。その後、互いの創作した作品を見せ合う機会を設け、作品に対する意見交換も行いました。作品のよかったところを共有しながらも、作品へのアドバイス等も行い、充実した時間を過ごすことができました。

高校生からは「普段やらない動きを経験したり、大学生の受賞した作品等を鑑賞したりすることで、大変充実した時間となり、ダンスの多様な可能性を感じる事ができた」「大学生の教え方が上手

であっという間に時間が過ぎた」などの感想がありました。大学生からは「高校生の純粋でひたむきにチャレンジする姿、そして吸収しようとする意欲に感化され、充実した時間を過ごすことができた」、「どのように伝えたらわかりやすいかを試行しながらではあったが経験することができ、指導する立場の難しさと楽しさを感じた」などの感想がありました。互いにダンスを通してかかわり合うことで、繋がりを得ることができました。



4人1組でコンタクトの動きに挑戦!

### 富士松北小学校特別支援学級の児童が来訪しました

2026年1月14日(水)、刈谷市立富士松北小学校特別支援学級15人と引率教職員5人が生活・総合学習の一環として本学を訪れました。

凍てつくような曇天の中、どきどきそわそわした児童を乗せたバスが大学に到着しました。子どもたちはそうっとバスを降り、緊張した様子で周囲をきょろきょろと見回していました。講堂前で集合写真を撮り、特別支援教育棟で行うプログラム体験に出発しました。

特別支援教育棟に移動すると生活科教育講座の西野雄一郎准教授と現職の大学院生が児童を歓迎し、セレモニーを兼ねたレクリエーションが行われました。音楽にあわせて手をたたいたりウィンクをしたりして、みんな笑顔で活動を楽しみました。



まずは曲に合わせて手をたたこう♪

その後、特別支援教育講座の吉岡恒生教授と、特別支援教育専攻及び特別支援教育特別専攻科の学生に迎えられ、大プレイルームに移動して遊具で遊びました。

学生たちに見守られながら、それぞれ思いっきり体を動かして楽しみました。

参加した学生から「教室では見られない子どもたちの生き生きした表情が見られた。また最後の見送りの時、見えなくなるまで子どもたちがバスの中から手を振ってくれた姿から、楽しく過ごせたのだと実感した。」という感想が寄せられ、引率した教員から「活動中、平日頃から言っているルール(話の聞き方、片付け、挨拶など)を守ろうと意識している姿が見られました。帰ってきてから、今年一番がんばったことを聞いたときに、「愛知教育大学でルールを守ったこと」と言っている子もおり、自己肯定感につながったと感じます。」という感想をいただきました。



思い思いに遊ぶ子どもたち



## 遠足や校外学習等の新たな目的地としての提案をする

### 川越中学校の3年生が授業体験やキャンパス見学を行いました

2026年2月9日(月)、三重県川越町立川越中学校の3年生148人と引率教員10人が本学を訪問しました。この取り組みは、川越町との連携協定締結の際に、野田敦敬学長が「未来共創プラン」で推進する“子どもキャンパス”として小中学生を迎え入れる活動を紹介したことがきっかけで実現したものです。

当日は、寒波による降雪の影響で到着が遅れるトラブルがありました。大学4年生で学生広報スタッフの伊藤梨央さんによるメッセージの後、6つのグループに分かれて授業体験やキャンパス見学を行い、限られた時間ながらも充実したプログラムを実施することができました。



学生広報スタッフの伊藤さんは自身の経験を熱心に語ります



川越町出身の寺本圭輔教授は大学ならではの設備で後輩への授業

伊藤さんの言葉が響いたのか、各授業体験に熱心に取り組む姿や、キャンパス見学で中学校との違いに感嘆の声を上げる様子が見られるなど、訪問を単なる校外活動ではなく、学びや成長の場として捉えているように感じました。

同校から届いた学年通信には、「『自分の経験を増やし、自分の考え方に気付くことは大きな財産』という伊藤さんの言葉が印象的で、さまざまな経験を通して知らない自分と出会い、向き合う場が大学だと感じた」という生徒の感想が紹介されていました。今回の訪問は、中学生のキャリア教育において、大学進学意義や教員を目指す学生の思いに触れる貴重な機会となりました。



動画はコチラ(本学公式YouTube)



### 附属名古屋小学校の2年生が遠足で来訪しました



学長先生!どうしたらもっと高く飛びますか?

4月28日(月)、附属名古屋小学校の2年生87人と引率教員4人が遠足で本学を訪れました。

子どもたちを乗せたバスが大学に到着し、野田敦敬学長があいさつを行い、続いて引率する学生が自己紹介を

を行い、クラスごとにプログラム体験へと出発しました。

プログラム体験では「学長室見学と学長先生のわくわく工作」「図書館見学」「馬とのふれあい体験」の3つのプログラムを順番に体験しました。「学長室見学と学長先生のわくわく工作」では、子どもたちが学長室を訪れ、普段見ることのできない部屋の様子を見学し、場所を移動して生活・総合専修の学生とともに紙コップのロケットを高く飛ばす工作を行いました。「図書館見学」では、大学の図書館をめぐり、とても大きな本や、古い地図など貴重な資料を見ました。「馬とのふれあい体験」では、馬術部の学生から馬の説明を受け、エサやりを体験したり、馬をなでたりして楽しみました。

プログラム体験を終えた後は AUE スクエアに移動してわいわいと昼食をとり、クラスごとの写真撮影を行い帰路につきました。

子どもたちからは「くふうしたら、よくロケットがとんで楽しかった(学長室見学と学長先生のわくわく工作)」「うまにたんぼぼをあげたとき、うまのくちびるが大きくてびっくりした(馬とのふれあい体験)」「ふつうにしゃべってもいいしょがあるなんて、びっくりしました(図書館見学)」という感想が、引率教員からは「大学の皆さんがあたたかく迎えてくださったので、子どもたちも安心して楽しく過ごせました。アテンドくださった学生以外にも声をかけてくださる学生もいてよかったです」という感想が寄せられました。また、参加した学生からは「子どもと会話するためには大学で学ぶこと以外の教養も必要であるし、子どもにももちゃ作りのやり方を伝える際にも専門的知識が必要だと思った」という感想が寄せられました。



お姉さんと外でお弁当、おいしー!



動画はコチラ(本学公式YouTube)



### 附属幼稚園児が本学でじゃがいも掘りを行いました

6月5日(木)、不安定な天候をかき消す快晴の中、自然観察実習園において、附属幼稚園の5歳児47人、幼児教育専攻の学生ならびに幼児教育講座教員や学生広報スタッフと事務職員合わせて総勢60人がじゃがいも掘りを行いました。



いっぱい採れるかな?

畑を管理する自然観察実習園の作業員から、じゃがいもの育ち方などの説明を受けた後、附属幼稚園の先生の掛け声を合図に園児が一斉に畑に広がり、自身の手

やスコップでじゃがいもを掘りました。会議の合間を縫って来た野田敦敬学長も園児一人一人に声をかけながらじゃがいも掘りに参加いただきました。

今年度は、自然観察実習園を管理する作業員が土の改良を行い、手に収まりきらないような大きなじゃがいもが多く、園児の歓声があがる場面が多く見受けられました。収穫が終わると園児達が袋いっぱい詰めたじゃがいもを手「じゃがいもがこんなにいっぱい採れたよ!」と笑顔で学生と会話をしており、これから教員を目指す学生だけではなく、教職員にとっても非常に貴重な体験の場となりました。

また、じゃがいも掘り後には、自然観察実習園の近くにある、本学の馬術部がお世話をしている馬や、ヤギなどともふれ合う機会もあり、園児達の元気な声が絶えない一日となりました。



## 大学に自生している竹を使ったアクティビティーの創出

### 大学のリソースの再発見

check it out!!

#### イベント「カブトムシのつかまえかたおしえます！」を開催しました

● ● ● ▶ テレビで放映されました！

7月27日（日）、2022年2月～3月に行われた本学初のクラウドファンディング「竹チップで子どもたちにカブトムシに触れる体験を。」の事業の一環として、本学キャンパス内でカブトムシを捕まえるイベント「カブトムシのつかまえかたおしえます！」を開催しました。講師として佐藤治先生（瀬戸つばき特別支援学校教諭）をお招きし、近隣の子どもたち11人とその保護者11人、学生ボランティア7人の合計29人が参加しました。

暑さが残る夕方、参加者たちは長袖・長ズボンに身を包み、教育交流館のラーニングcommons 3に集合しました。佐藤先生から、カブトムシが集まりやすい樹の種類や採集する際の注意事項などの説明を受けた後、カブトムシを早くつかまえて子どもたちがウズウズしてきたところで、まだまだ暑さの残る外に元気よく繰り出しました。

佐藤先生の説明を聞きながら、学生と協力して、みんなでカブトムシが集まりそうな木を探しました。学内のいろんな場所を観察しながら探し回りましたが、なかなかカブトムシは見つかりませんでした。子どもたちが落ち込みはじめたとき、とっておきの場所でたくさんのカブトムシを発見し、みんなで大興奮でした。



見てみて、ぼくのカブトムシだよ！

大喜びの子どもたちは、自らの手で恐る恐るつかまえたり、木の高い所にいるカブトムシを網で採ったり、保護者に肩車してもらいながら採ったりと、始終ニコニコしながら自分たちの虫かごに入

れていました。

採集から戻ると、クラウドファンディングで集めた資金で購入した飼育セットにカブトムシが二匹ずつ入ったものが土産として用意され、子どもたちは満面の笑顔で帰っていきました。

参加した子どもや保護者からのアンケートでは「カブトムシの生態を詳しく教えてもらえたうえ、実際に捕まえることもできた」「大学生との交流があり、枝を押さえて子どもを通してくださった声をかけてくれるなどのフォローもしていただいたのでありがたかったです」などの嬉しい感想が寄せられました。また、学生ボランティアからは「カブトムシ採集に関してだけでも、質問に答えられないことが数多くあった。また、学校や授業で扱っていないことや趣味の経験を伝えることもあったので、幅広い教養は大切だと思った」という感想がありました。



カブトムシはどこだろう？

### 使途特定基金の状況報告

2023年11月より、愛知教育大学として初となるプロジェクト等使途限定基金事業「子どもキャンパスプロジェクト」がスタートしています。募集期間は2023年11月から2026年3月までの2年5か月で、目標額は250万円ですが、2026年1月現在で約72万円のご寄付をいただきました。

いただいたご寄付は、子どもたちの工作道具やカブトムシイベント用の消耗品、スポーツイベントの講師謝金等に使用させていただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

私たちは、学生が子どもたちとふれあう経験の場と未来を担う子どもたちに笑顔があふれる体験の場を、皆様と共に創っていきますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。



### 野田学長のつぶやき



「子どもキャンパスプロジェクト」も5年目を迎え、定期的に開催しているイベントに新たな取組が加わるなど、内容の充実が図られています。2025年度は、相互連携協定を締結している市町や教育委員会の協力のもと、三重県の桑名高等学校や川越中学校など県外から参加する学校も増えました。また、本プロジェクトにご賛同いただき「使途特定基金」へご寄付いただける方々に心より感謝申し上げます。将来教職を志す子どもたちが増えるよう取組を進めてまいります。引き続き、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

教育リソースデータベースを設置し、  
教育現場の課題解決に貢献する教育の  
プラットフォームを構築します。

- ケーブルテレビや教育委員会と連携し、教育現場が抱える課題の解決に向けた情報発信を行う番組を制作する。
- 学内の教育に関する様々なリソースを広く紹介するためのコンテンツを企画・制作し、それらを地域社会に向けて発信する。



### プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 紀村 真一郎 太田 知啓 井成 浩文 浅岡 明美 小野 笑実 影山 実紀

## 教育のプラットフォームのコンテンツ制作

check it out!!  
テレビで放映されました！

10月1日(水)、プロジェクトメンバーと主に西三河地域で通信・放送事業を展開している株式会社キャッチネットワークと会議を開催し、共同制作番組や相互連携協定の締結に向けた具体的な取組について協議を行いました。その結果、12月13日(土)に開催の第2回「こどもまんなかシンポジウム」を同社が取材し、ニュース番組として発信すること、さらに同シンポジウムの特集番組として約10分間のコンテンツを制作することが合意されました。同シンポジウムの様子は同社の番組「KATCH TIME 30」内のニュースで放映され、コンテンツ(動画)としても完成しました。このコンテンツは本学公式YouTube内の未来共創プランのページ内で公開していますので是非ご覧ください。

動画コンテンツのURLはコチラ

<https://www.youtube.com/watch?v=vQB-0kq6zGs&t=3s>



インタビューを受ける野田敦敬学長



インタビューを受ける本学大学院生



「KATCH TIME 30」で放映された様子①



「KATCH TIME 30」で放映された様子②



グループディスカッションの様子

## 野田学長のつぶやき

国立大学協会が募集するシンポジウムには、学長就任以来、毎年応募しており、2025年度も採択されました。この事業の一環として開催した第2回「こどもまんなかシンポジウム—教職と教育支援職の魅力再発見!—」の様子を、本学と関係の深い株式会社キャッチネットワークの協力により、約13分の動画としてまとめています。参加した子どもたちや学生による率直なメッセージをぜひご覧ください。目頭が熱くなること間違いなしです。





よりよい教育の未来につながる教職の魅力を共に創り出し、発信します。

- 「教職の魅力共創シンポジウム」を通して、多様な立場の方々の意見交換を行う。
- 教職の魅力を伝えるリーフレットや動画コンテンツを作成する。
- 多様な立場の方々から原稿を募集し、シリーズ叢書『教職の魅力共創』を刊行することで、地域社会と共によりよい教育の未来につながる教職の魅力を共創する。

プロジェクトメンバー

真島 聖子 小塚 良孝 宮川 貴彦 竹川 慎哉 田口 達也 井成 浩文 浅岡 明美 小野 笑実 影山 実紀

叢書「教職の魅力共創」の9巻と10巻を刊行

2025年度の叢書「教職の魅力共創」は、社会共創編『新たな学び・学校のかたち(5)』、教科・領域編『ことばがひらく世界を共創する』を刊行しました。

2021年度から始まった本叢書シリーズは、2025年度までで計10巻を刊行しております。

シリーズ概要

愛知教育大学(主催「教職の魅力共創」編集委員会 委員長 野田敦敬)では、多様なステークホルダーが「教職の魅力」を共に高め、創り、共有していけるような場として、叢書シリーズを立ち上げました。本シリーズには、学校教育や教職について広く考えを求める「社会共創編」と、各教科等の視点から多面的な教職や教材等の魅力を共創・共有する「教科領域編」があります。



叢書「教職の魅力共創」⑨

新たな学び・学校のかたち(5)

著者 編集：「教職の魅力共創」編集委員会  
 発行日 2026年3月発行  
 定価 500円(税込)  
 出版 愛知教育大学出版会

本書は「新たな学び・学校のかたち」という統一テーマで、昨今、教員の養成と研修に関して大きな動きが見られることから、以下の2つの内容を取り上げました。

- (1) 教員養成(教職課程)または教員研修の充実に向けた取り組みや考え
  - (2) 特色のある学校の形態・運営に関する取り組みや考え
- 愛知県内外の全国の教育関係者による計8本の論考が収録されています。

叢書「教職の魅力共創」⑩

ことばがひらく世界を共創する

著者 編集：「教職の魅力共創」⑩編集委員会  
 発行日 2026年3月発行  
 定価 1,000円(税込)  
 出版 愛知教育大学出版会

本書では、ことばがひらく世界という視点から教職の魅力を共創することを試みました。

まず、第一部では、本学の国語教育講座の教員が考える、それぞれの専門分野の魅力が語られています。第二部では、座談会において、現職経験をもつ教員と本学の学生・院生たちが、国語の魅力について語り合った様子が掲載されています。そして、第三部では、小学校・中学校・高等学校において、国語を教える魅力について語られています。





### 教職の魅力共創を伝えるコンテンツを作成

教職の魅力伝えるリーフレットや動画コンテンツを作成しました。リーフレットや動画コンテンツの制作・発信を通じて、教職をめぐる社会の声を聴き、対話の場を組織し、新たな教職の魅力と共に創ることを意図しています。2025年度も多様な観点や立場から教職の魅力について語るインタビュー動画（3人の現職教員）を制作し、「教職の魅力共創」ウェブサイトに掲載しまし

- た（現在合計32本のインタビュー動画を作成済み）。
- また、これらのインタビュー動画の紹介やプロジェクトの内容についての発信、叢書刊行の案内を目的にリーフレットを作成し、県内外の教育関係者に配布しました。
- 教職の魅力共創特設サイトではこれまでに作成したインタビュー動画とリーフレットを公開しています。是非ご覧ください。



教職の魅力共創特設サイト  
インタビュー動画ページ  
<https://cocreate.aichi-edu.ac.jp/movies/>



教職の魅力共創特設サイト  
リーフレットページ  
<https://cocreate.aichi-edu.ac.jp/rapture/leaflet/>

### 2021年度入学生を対象とする教員志望度に関する学内調査の統合と分析

公立学校教員採用選考試験の受験者数減少傾向を食い止める対策を講じる上で、本学学生の入学時から卒業時までの教員志望度の変容と実際の進路とを結びつけて分析することが重要です。在学中の教員志望度の変容と進路に関する情報を得て分析を行うためには、本学の各部署が個別に実施している調査内容を把握してデータの収集を行い、有益な情報を抜き出して編集する必要があります。2025年度は2021年度に入学して2024年度に卒業した学生を対象として、教員志望度の変容と実際の進路の関係について検討しました。

具体的には、調査対象学生の就職先データを教員内定と教員就職ではない公務員内定または企業内定の2つのグループに分類し

- て、各学年で実施されたアンケート調査の結果においてそれぞれのグループに特徴的な回答傾向があるかどうかを分析しました。記述統計に基づく分析の結果から、公務員内定・企業内定のグループにおいては教員志望度の変化の特徴が示されて、またその要因についても部分的に示されました。
- 同様の調査・分析を、今後卒業する他の入学年度の学生に対して継続的に実施することで、年度間に共通する傾向を明らかにしていきたいと考えています。更に、本学の教育・学習データ活用ポリシーに基づき、教員志望度を高める方策の策定に必要な根拠となるデータの提供を目指します。

### 野田学長のつぶやき

叢書企画も順調に刊行を重ね、2025年度で全10巻を刊行することができました。なかでも、教科・領域編の『ことばがひらく世界を共創する』は、2025年度末で退職される丹藤博文名誉教授が企画・編集を担当され、「ことばの魅力」を多角的に論じた力作です。また、社会共創編『新たな学び・学校のかたち(5)』では、2025年度も執筆者の半数が県外からの寄稿となり、本企画の広がりを感ぜさせる内容となっています。





協定校を始めとする海外の教育機関との連携を密にして、グローバル化に対応したプログラムを学部と大学院で整備します。

- 海外協定校に赴き、研究者等の招待・派遣制度の整備について検討するとともに、海外の教育現場を視察することで教職員の国際理解研修を行う。
- 教職大学院に入学した教育委員会派遣、附属学校教員が海外研修できる制度を構築することを検討する。

プロジェクトメンバー

岩山 勉 小塚 良孝 高木 遠慧 真島 聖子 北野 浩章 大鹿 聖公 野平 慎二 寺本 圭輔 ベネマ ジェームズ 幅 良統 西野 雄一郎 玉越 貴文 山本 京佑 高坂 渚

グローバル化に対応した教員養成プログラムの拡大

インドネシア・国立セベラスマレット大学との協定締結と学生交流プログラムの試行

12月9日(火)、インドネシア・国立セベラスマレット大学と交流の覚書を締結し、同大学教員養成・教育学部と「教員養成課程の学生交流パイロットプログラムに関する協力合意書」を取り交わしました。これにより、海外教育実習プログラムの構築に向けて大きな一歩を踏み出しました。



附属高等学校での英語による生物授業

これに先立ち、10月30日(木)～11月22日(土)に同大学の生物専攻の学生2人を本学に招き、附属高等学校で英語による生物授業を実施しました。本学教員・大学生・留学生と協働した授業は、生徒にとって新鮮な学びの機会となり、大きな反響を呼びました。



教育実習後インドネシア式の感謝のポーズで記念撮影

教職大学院生の教育実践(海外研修)プログラムを実施

大学院生と学部生がともに参加できる教育実践(海外研修)プログラムについて、以下のとおり実施しました。  
また、2025年度の成果を踏まえ、派遣先の拡大を図り、2026年度から新たに中国・上海教育国際交流協会、インドネシア・国立セベラスマレット大学、アメリカ・インディアナ州立大学で行うプログラムを策定しました。これらのプログラムを、2026年度の日本学生支援機構「海外留学支援制度(協定派遣)」の支援事業に位置付けるべく申請しました。

タイ・チェンライラチャパット大学

【期間】8月2日～8月30日  
【人数】教職大学院生1人、学部生1人

【派遣先での活動】現地の大学、高校にて、日本語指導の見学、日本文化の指導、紹介などの行事参加、日本語教育教材の作成、日本語の模擬授業の実施



協定校の大学生への日本文化紹介



協定校の大学生とのフィールドワーク

韓国・国立晋州教育大学校

【期間】9月4日～19日  
【人数】教職大学院生5人、学部生4人  
【派遣先での活動】同大学校附設小学校、公私立学校での授業実践、日本語授業参観、ソウル市でのフィールドワーク



附設小学校の生徒との交流



私立高等学校の日本語授業への参加

モンゴル・国立教育大学

【期間】9月4日～12日又は29日  
【人数】教職大学院生3人、学部生9人  
【派遣先での活動】同大学での科学・ものづくり教育や日本文化紹介、異文化体験。同大学や現地の小、中、特別支援学校での授業補助を通じた実践



附属小学校での模擬授業



民族衣装・モンゴル書道体験



## カンボジアでの教育支援と国際的評価の獲得

12月に、「カンボジア健康教育支援プロジェクト」の2025年度の現地活動を実施するため、野田敦敬学長をはじめ教職員5名がカンボジアへ渡航しました。その際、カンボジア国立教育研究所と、今後の学生交流プログラムや教職大学院生専用の教育実践プログラムの実施内容などについて協議しました。



カンボジアの小学生との交流



受賞の喜びを分かち合うカンボジア教育省  
キム・セタニー常任長官と野田学長

さらに、本プロジェクトの長年にわたる活動がカンボジア王国から高く評価され、同国「ロイヤル・モニサラポン勲章」の最高位である大十字章（Grand Cross）を受章し、渡航団が滞在中の12月24日（水）に伝達されました。同勲章は、教育・文化・科学・社会貢献にお



意見交換の様子

ける顕著な功績を象徴するカンボジア王国における最高の荣誉であり、日本人・日本の団体として大学が受章するのは初めてです。

2026年2月には、カンボジア王国教育・青少年・スポーツ省学校保健局な

らびにカンボジア国立教育研究所の関係者を本学に迎え、附属学校の訪問や日本の学校給食体験を通じて、実践的な知見の共有と相互理解の深化を図りました。



授与式後笑顔で記念撮影に臨む本学訪問団メンバー

## 海外協定校との共同研究を採択

海外協定校との共同研究について学内公募を行い、タイ・チェンライラチャパット大学（研究テーマ：日本語学習者が間違えやすい語の意味と運用についての多角的研究）及びカンボジア国立教育研究所（研究テーマ：カンボジア学校における健康教育の定着に向けたカリキュラムの開発）の2件を採択しました。

それぞれ、論文としての成果発表に向けて鋭意取り組み中です。



カンボジア協定校の共同研究者による日本の教育現場視察

## 教職員の国際理解研修を実施



タイ協定校の教職員事務室での仕事体験

教職員の国際理解を深めるため、タイ・チェンライラチャパット大学及び韓国・晋州教育大学での学生の教育実践プログラム実施の際に、事務職員を随行させ、研鑽の場としました。現地の教育現場視察や教職員との意

見交換を通じて、国際的な視野を広げる貴重な機会となりました。



韓国協定校の教職員との交流

## 野田学長のつぶやき

2025年度も、多くの協定校等からの教員・学生等の訪問を受け、交流の広がりを実感しました。なかでも、年末に1週間にわたりカンボジアを訪問した際には、長年にわたる交流の積み重ねを改めて感じる機会となりました。この訪問に際し、カンボジア王国教育・青少年・スポーツ省キム・セタニー長官より、カンボジア国王からの「ロイヤル・モニサラポン勲章」を授与され、大変光栄に存じます。あわせて、本学大学院を修了した留学生在が現地の教育研究機関において中核的な役割を担い、活躍している姿に大きな誇りを感じました。





# 附属学校園と教職大学院との連携を強化し、教育の実践的研究拠点を構築します。

附属学校園と教職大学院の教員が連携を強化して、共同で院生指導や実践研究を行い、研究論文の執筆や学会報告を行うことで、教育の実践的研究拠点を構築する。

## プロジェクトメンバー

真島 聖子 鈴木 一成 小倉 靖範 小塚 良孝 石川 恭 麓 洋介 村松 愛梨奈 古川 ゆう子 鬼頭 百合子

## 教職大学院の授業「教科教育の理論と実践（保健体育）」での院生指導

附属名古屋小学校の体育授業づくりについて、「春の公開授業・検討会」及びそれに向けての授業検討会において、同校の先生と本学の教職大学院生が、授業づくりの構想段階から参加することで、一つの授業をいかに創るのか、当事者意識をもって学ぶことができました。



模擬授業検討会の様子

- また、附属幼稚園の休日保育参加について、附属名古屋小学校体育館で実施した運動遊びにおいて、具体的な運動遊びの環境設定と幼児及びその保護者へのかかわり方を、教職大学院生が実践を通して学ぶ機会となりました。さらに、小学校・中学校・高等学校の教員を目指す教職大学院生が、幼児期からの運動遊びの重要性を学ぶ機会にもなりました。

## 附属学校における実践研究と成果発表

附属学校の生徒が安心して学習できる環境を整備するために、附属名古屋中学校・附属岡崎中学校・附属高等学校において、トイレでの生理用品設置配布の試行による効果や困りごとを把握する実践研究を進めています。

附属高等学校での実践成果は 2024 年度に日本養護教諭教育学会で学会発表を行い、2025 年度には愛知教育大学附属高等学校研究紀要に論文を投稿しました。また、2024 年度まで附属高等学校で月経相談に関する実践研究をした教職大学院生が 2025 年度の国際学会（22nd School Nurses International Conference）で上記の実践研究について発表しました。さらに、附属岡崎中学校および附属高等学校と連携した心肺蘇生に関わる効果的な授

- 業実践、全ての附属学校園と共に「ジェンダーと多様性」に関する図書教材の充実を図るプロジェクト等も進めており、附属学校と連携した実践研究成果は 2026 年度以降の教職大学院授業でも紹介し、理論から実践に繋げるだけでなく、学校現場での実践から理論を見出すことを示す授業資料として活用予定です。



トイレの手洗い場の様子

## 附属名古屋小学校の模擬授業検討会に参加した教職大学院生の感想

今回の研究会を通して、探究的な学習や自己評価的な取り組みの中にも、さらに工夫の余地があることを実感しました。子どもの自律的で自由な学びには、子どもが自ら問い、考え、つなげていけるような支援や構造が必要であると改めて感じました。これからの授業実践の機会には、資料の質や量、発問、教師の介入の仕方など、一つひとつを見直し、より意味ある探究ができるよう工夫していきたいと思いました。子どもたちが「社会を学ぶことの楽しさ」や「社会と自分とのつながり」を実感できるような授業づくりができるよう、今後も意識していきたいです。

- 研究授業ではなく、先生方が授業研究をされている場に参加させていただき、教員が学び続けることの大切さを改めて実感しました。夏休みの時期に9月に向けた授業を他教科の先生方と共に検討し、新しい手立てを提案される姿から、日々挑戦し続けていることが伝わり、45分の授業に込められた先生方の思いの深さを感じました。



附属名古屋小学校大橋先生の模擬授業検討会

## 野田学長のつぶやき

各教科等において、附属学校と大学による共同研究は、教員同士の連携にとどまらず、大学院生を含めた形で一層深化しています。附属学校に勤務しながら教職大学院で学び、修了された方も、2025 年度末で 15 人となりました。多忙な業務と学修を両立される中での取り組みは容易ではなかったと思いますが、2025 年度の「実践研究報告書」発表会では、国語科、社会科および家庭科の発表において、理論と実践を往還させた大変意義深い成果が示されました。





教育委員会や教育現場等との緊密な連携を通して、附属学校園が今後の公立学校等のモデルとなる実証研究に取り組みます。

- 附属学校園に所属する研究主任クラスの教員と大学教員により構成されたプロジェクト・チームが主体となり、毎月1回、リモートで協議会を開催する。
- 附属学校園同士の交流や大学との共同研究によってモデル授業を開発し、研究会・研修会で還元する。

プロジェクトメンバー

杉浦慶一郎 鈴木一成 小塚良孝 真島聖子 石川恭 加納誠司 砂川誠司 請井貴夢 今村伸昭 小嶋功 滝澤心也 後藤裕考 山田泰弘 佐々瞳 松本哲廣 古川ゆう子 鬼頭百合子 柳野雄介

公立学校のモデル授業としての学びの進化【研究発表会の様子】

【附属幼稚園】

年長児は、プラネタリウムごっこやお寿司屋さんごっこなど、経験したことや心に残ったことを思い出しながら、自分たちのイメージに合った材料や遊具を選んで遊びに再現することを楽しんでいました。午後の「保育を語る会」では、当日の幼児の姿を“幼児期の終わりまでに育てほしい姿”の視点から捉えて協議を行いました。



プラネタリウムごっこ

【附属岡崎小学校】

子どもにとらえと、それをもとにした教師支援に力を入れて取り組みました。提案授業での子どもの姿から、教師支援が有効であったかを中心に協議会を行いました。子どもをどのようにとらえるとよいか、教師ができることは何かを考える場となりました。協議会の後半では、助言者からご指導をいただきました。



音楽の授業の様子

【附属岡崎中学校】

子どもが将来、幸せな社会を創るために果敢に挑戦する人になることを願った研究の成果を、研究図書発刊と授業公開で世に問いました。学びを行動につなげる確かな考えを子どもが構築するための“自己考察”と“他者考察”の実際を発信し、講演会講師である東京大学大学院教授の藤村宣之先生からもご高評をいただきました。



授業公開の様子

【附属特別支援学校】

「人とともに生きる子」を主題に掲げ、5年次研究の研究1年目をスタートさせました。子どもたちが資質・能力を身につける過程に、「人とかかわる場」を意図的に設定し、これまで取り入れてきた「五つの視点」に基づいた支援を講じる中で、子どもが人とかかわって学び、「楽しい」「うれしい」と喜びを感じることができる授業を公開しました。



授業公開の様子

【附属名古屋小学校】

2023年度より研究を行っている「わくわくつながる授業デザイン」の最終年次として、3つの資質・能力を育成するため、子どもも教師も「つながる」良さを感じることのできる授業を各教科デザインし、授業公開しました。また、意見交換会では授業中の子どもの姿を通して提案授業についての協議を行いました。

【附属名古屋中学校】

「中核となる概念を基に思考する力を育む授業の創造～新たな文脈の課題に取り組むことを通して～」を研究主題に掲げ、概念として習得した知識を、新たな文脈の課題に対してどのように転移させていったらよいのか、教員一同試行錯誤しながら取り組んできました。概念を習得する場や、それを活用して取り組む場面を実際に参観していただき、研究成果の一端を感じていただけたと思います。

【附属高等学校】

新しい全体テーマ「人生を切り拓く探究力ー各教科の取り組みについてー（1年次）」として公開されました。第1分科会は数学科、第2分科会は国語科、第3分科会は個人研究発表として実施され、総数64人の参加となりました。

大学・附属学校園共同研究論文集『共創』第4号を刊行しました

大学と附属学校園が連携した先導的な教育モデルの開発のために、「大学・附属共同研究論文集『共創』」を刊行しました。2025年度で第4号となりますが、大学教員及び附属学校園教諭、公立学校教諭による研究をまとめたものとして、総括論文、実践研究論文、実践研究ノート、実践報告、News Letterで構成しています。



「共創」1～4号



野田学長のつぶやき

毎月オンラインにより、各附属学校園で研究の中核を担う教員と大学教員が参加する情報交換の場を設けています。本プロジェクトの取り纏め役である保健体育講座の鈴木一成准教授による丁寧な運営のもと、各附属学校園の公開研究会において実施したアンケート調査の分析や、共同研究論文集『共創』への投稿準備などが、計画的に進められています。今後は、附属学校園全体で連携を深め、将来の学校の姿を先取りするような研究開発に一体となって取り組んでいくことを期待しています。



教科等横断し、協働的に学び合う次世代型プログラムを開発するとともに、教育効果を客観的に検証する評価システムを構築し、学生の資質向上や大学の授業改善につなげます。

「遠隔・オンライン教育」、「ICT を活用した、効果的な学習支援」、「探究的な学習を通じて協働的に学び合う教科等横断学習」について、調査研究を行い、次世代型教科等横断プログラムを開発する。

プロジェクトメンバー

伊藤 貴啓 上原 三十三 小塚 良孝 竹川 慎哉 真島 聖子 岩田 吉生 松井 孝彦 樋口 一成 宮川 貴彦 縄田 亮太  
西野 雄一郎 田舎片 麻未 後藤 成美 柴山 麻衣

「試行錯誤」を体験するワークショップを開催しました

2026年2月8日(日)、教科横断探究コースと共催で「折り紙1枚から始まるワークショップ～試行錯誤から生まれる気づき～」を開催しました。ワークショップの企画・運営は教科横断探究コース第19期学生が中心となり、事前のポスターでは、「折り紙」“ミッションに挑戦”“試行錯誤”といったキーワードのみ発表され、具体的な活動内容は当日のお楽しみと伏せられていましたが、学生、教職員併せて32人が参加し、当日は「何をするんだろう」と期待を持って集まりました。



ワークショップのポスター



主催者から趣旨説明の様子

1. 趣旨説明

まず、主催の第19期学生から、「自分で実際に体験することを大事にしてきたこと」「やってみると失敗や試行錯誤の連続であったこと」「その過程での学びや体験そのものに教材としての可能性を感じたこと」など、ワークショップの趣旨説明があり、体験や試行錯誤、そこから生まれる発見や学びを実感できる時間としたい、と述べて、開会しました。

2. 活動①

続けて、オリジナルのゲームにより、5つに分かれたグループごとに自己紹介を兼ねたアイスブレイクを行い、大いに盛り上がったところで、いよいよ“本日のミッション”が発表されました。今回のワークショップのミッションは、折り紙を使ったペーパードロップゲームで、「紙の形を工夫して、落ちる時間をできるだけ長くしよう！」です。

まずは、各グループが自由な発想で、挑戦を重ねました。「落とす高さ」「手を離して落とすだけ(飛ばしたり投げたりしない)」「はさみ・テープ使用可」などのルールの下、それぞれ切ったり折ったり貼ったりと思いつきの工夫を凝らし、「意外とうまくいかない」「なかなか2秒を超えられなくて悔しい」など、夢中で体験に取り組みました。



切ってみる・・・



折ってみる・・・



みんなどうやってる？

3. 共有→活動②

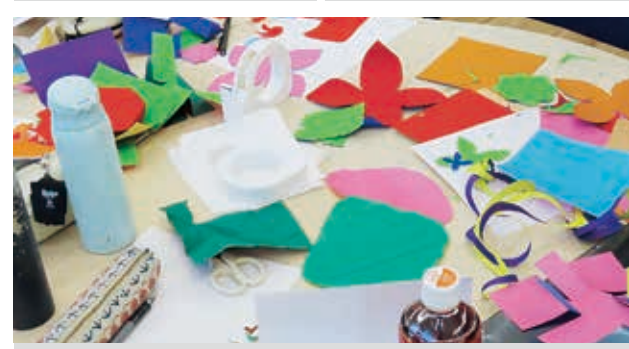
続けて、グループをシャッフルして各グループで功を奏した工夫を共有し合い、他グループの工夫をヒントに、もう一度チャレンジする時間が設けられると、休憩の時間になっても新たな工夫と試行錯誤に没頭する姿があちこちで見られました。



うちのグループではこうやってみよう！



えいっ



いっぱい試しました



#### 4. 発表

最後に、「自分のグループの工夫」「他のグループから得た工夫」「記録の変化」についてグループごとにまとめ、発表しました。それぞれに着眼点の異なる工夫により、どのグループも当初の記録を大幅に延ばし、最長で4秒を超える大記録が見られました。

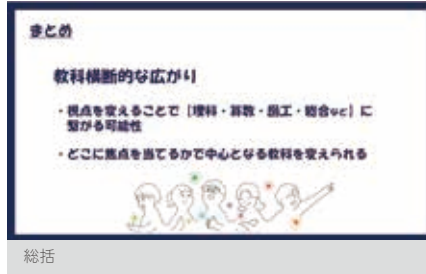


いっぱい試してこうなりました！



うちのグループはこんな感じでした

終了に当たって、主催の第19期生から、「誰もが関ることのできる活動であるということは、多様な子どもたちが集まる教育の現場でも大切にしたい視点であること」「体験を通して学びが生まれる過程を実感できることそのものが教材・探究のモデルであること」「同じ教材でも焦点の当て方によって中心となる教科を変えることのできる教科横断的な広がりがあること」など、今回のワークショップを振り返り、総括しました。



総括

参加者からは、「他の班の意見を取り入れつつ、より良いと思えるものを作るのは非常によい経験になった。」「正解がないので「不正解」がなく、たくさんチャレンジ

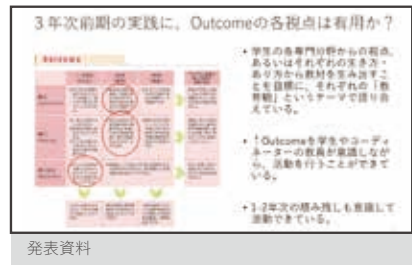
ができた。アイデアが尽きなかった。やらされるのではない、ワクワクする学びで、とても楽しかった。」「同じ課題に取り組んでいるのに班によって全然違う工夫をしていて面白かった。」「一枚の折り紙だけでこんなにも夢中になると思いませんでした！本当に『創意工夫』を体現したようなワークショップだったと思います。」「最初は正方形を越えられないとどの班も話していたのに、結局正方形じゃない形でどの班もそれ以上の記録を導いているのが、探究そのものであるなと感じました。」など、体験を楽しみつつ学びを実感する声が聞かれ、主催者のねらいが十分に参加者に届いたことが伺えました。

### 「日本教育大学協会研究集会で研究報告を行いました」

教科横断探究の教員養成カリキュラムの実施・再検証について、プロジェクトメンバーで構成された「学習会」を2025年度には8回実施し、「授業改善サイクル」の仕組み構築にあたって、改善課題の抽出方法や、改善の取組等を実施する時期などの具体について検討しました。

また、「教員養成の次世代型教科横断プログラム開発」の活動として、本学では教科横断探究コースの学修で目指す Vision と Outcome を作成しましたが、この Vision と Outcome の有用性について、教科

横断探究コースの学修事例から分析した研究報告を、9月27日（土）に開催された日本教育大学協会研究集会で報告しました。



発表資料

### 佐久島しおさい学校で実践研究を行いました

9月30日（火）～10月1日（水）、西尾市立佐久島しおさい学校において、学生が授業実践を行いました。

教科横断探究教育の実践として、理科の授業では「佐久島の地層の観察」、図工では「佐久島の土と砂を用いた絵の具」を題材にした授業づくりを行いました。



理科の授業実践の様子



図工の授業実践の様子

準備に当たっては、佐久島しおさい学校の先生方にご指導をいただきながら協議を重ねて当日に臨みました。

「ふるさと学習」の参観では、児童生徒が行う「佐久島太鼓」の練習から、佐久島に受け継がれる文化を感じさせていただきました。また、夕方には校庭で「さくスポーツクラブ」の交流も行い、児童・生徒・教員と学生と一緒にサッカーを楽しみました。



授業準備でご指導いただく様子

### 野田学長のつぶやき

「6年一貫教員養成コース」から始まり、その後「教科横断探究コース」へと発展しながら、両コースを通じて20年にわたる歴史を積み重ねてきました。2025年度は第19期生を中心に、折り紙を題材としたワークショップが企画・実施されました。折り紙は、多様な発想や表現を引き出す素材であり、学びを深める有意義な実践となりました。

また、佐久島しおさい学校での実践研究は、10年以上前に本コースの授業を担当していた際、佐久島を訪れ、その魅力に触れたことを契機として始まった取組です。小規模校が増加する中、こうした実践は、小規模校における実践力を高める貴重な機会となっています。





学生・院生・教員・事務職員が対話する場をつくり、学ぶ側（学生・院生）と供給する側（教員・事務職員）が互いの声を聴き合うことで相互理解を深め、教職学の協働・コミュニケーションをより活発にし、よりよい大学づくりにつなげます。

- 教職学協働のFD・SD研修や各種イベントの企画・運営を行い、参加を促す。
- 教育研究創成センター・FD開発部門の活動と連携した研究を行う。

プロジェクトメンバー

太田 知啓 真島 聖子 小塚 良孝 國府 華子 相羽 大輔 田舎片 麻未 石川 雅章 高嶋 香苗 北川 雅崇 永田 勇生 神谷 知穂 鈴木 能梨子 繁野 哲 小笠原 有香 寺田 美穂 安藤 由圭

FD・SD 研修会「あなたの声が聴きたい！—共に創る学修者本位の教育—」を開催

2026年1月28日(水)、FD・SD研修会「あなたの声が聴きたい！—共に創る学修者本位の教育—」を開催しました。

本研修会は、2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）において、大学に求めている「学修者本位の教育への転換」に関して共通理解を図ることを目的とし、教員・事務職員・学生・大学院生が一堂に会い、心理的安心に支えられた責任ある応答関係を軸に、それぞれの考えや思いにじっくりと耳を傾け、学び合う場として企画されました。



リラックス・ティータイムの様子

当日は、学生・大学院生 48人、教職員 41人の計 89人が参加し、次世代教育イノベーション棟（AUE カキツバタホール）にて対面形式で行われました。

研修会は、リラックスした雰囲気の中で行われるティータイムから始まり、義務教育専攻社会専修3年の山田陽菜さんによる司会進行のもと、野田敦敬学長の開会あいさつが行われました。



開会あいさつをする野田敦敬学長



話題提供する小塚良孝副学長

続いて、小塚良孝副学長から「学修者本位の教育への転換」についての話題提供があり、参加者は、本学のディプロマ・ポリシーや「学修者本位の教育への転換」に向けた本学の取組などについて理解を深めました。



会場の様子

その後行われたグループワークでは、学生・教員・職員が混ざり合い、それぞれの立場から、本学が学修者本



グループワークの様子

位の大学になるためにどのような改善が必要かというテーマで、活発な意見交換が行われました。

全体交流の場では、各グループの代表者がグループワークで話し合った内容を発表し、熱意ある提案が多く出され、参加者全員がじっくりと耳を傾けました。

最後に、野田学長から、全体交流の場で発表された内容に対して総括コメントがあり、國府華子副学長から「今日ここで交わされた活発な意見を自分たちだけに留めず、ぜひ仲間を持ち帰り共有していただきたい。そうした対話を通じて学修者本位の考えを浸透させ、大学全体で学修者本位の教育への転換を盛り上げていきましょう。」と閉会あいさつが述べられ、研修会は盛況のうちに終了しました。

研修会後のアンケートでは、「このような研修会に初めて参加したが、私たち学生の声をきちんと聞いてもらえたという実感があった。（学生）」「様々な立場から問題について考えることができ、大学をもっと良くしていけるという希望や意欲が高めることができた（学生）」「学生の率直な意見を聞ける機会とな



発表する学生①



発表する学生②



り、次年度の授業内容を考えるにあたって学生が置かれている状況やニーズを理解する助けになった。(教員)「ただの不満ではなく、相手のことを思いやる、背景を意識した上での発言が多く、共に考え」という場づくりがしっかりできていた。(事務職員)「教員や職員が決めたことを学生が従うのではなく、学生自身が主体的に学び、自分自身の成長につながったと実感できることが大切だとわかりました。まずは学生側と教職員側で話し合い、お互いが大学を作り上げていくという意識改革が大事だと思いました。(事務職員)」といった感想が寄せられ、非常に満足度の高い研修会となりました。



閉会あいさつをする國府華子副学長

本研修会で出された貴重な「声」は、単なる意見交換で終わらせることなく、将来の大学政策へ反映させるための吟味を行い、持続的な「改善のサイクル」を回していきたいと思えます。



FD・SD研修会のポスター

check it out!!



### 「けしかすボックス」の作り方動画の制作

▶ 動画はコチラ (本学公式 YouTube)

2024年度の未来共創プラン戦略8教職学協働プロジェクト「学生・院生の居場所づくり検討チーム」では、ラーニングcommonsの環境改善の一環として、机の上を快適に保つためのアイテム「けしかすボックス」の作り方動画を制作しました。2025年度は本動画を、多くの方に活用いただくことを目的として、本学公式YouTubeアカウントにて公開しました。教職員と学生が共に知恵を出し合った成果を、ぜひ動画を通じてご覧ください。

URL: <https://youtu.be/mkdH2QTZIH0?si=khukGQeatFJiwpQ7>

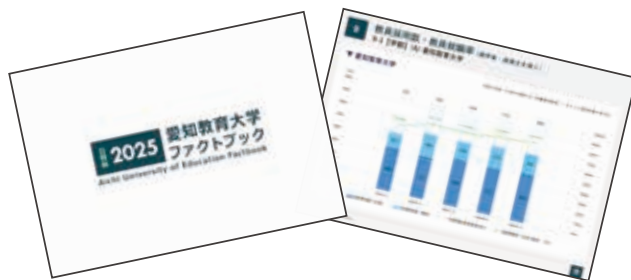


動画のサムネイル

### ファクトブック 2025 の作成

IR 室において毎年度発行しているファクトブックの 2025 年度版を発行しました。ファクトブックは、「見える化」した教員就職実績など本学に関する様々な情報を公開することにより、本学の現状について理解してもらうとともに、他大学の状況と比較することで、本学の強みや課題を学内構成員に認識してもらうことを目的として作成しています。

IR 室では、本学における取組の成果検証などに資するよう、継続して必要なデータの収集を行っていきます。



ファクトブック 2025

### 野田学長のつぶやき

当日は、学生・教職大学院生が約 50 人参加し、全体の半数以上を占めるなど、会場が満席となる盛況ぶりでした。これは大きな成果であったと考えています。また、急遽司会を務めることになった学部 3 年生の山田さんは、落ち着いた進行を見せ、着実に力を付けている様子がうかがえました。さらに、「学修者本位の教育への転換」について的小塚副学長による説明も大変分かりやすく、理解を深める機会となりました。皆さまから寄せられた声を、今後の大学運営に可能な限り反映してまいります。





# 国公立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。

国公立大学と連携協定を締結して、教職大学院を核としたネットワークを構築します。

## 第4回 連携協定大学ネットワークフォーラムを開催

2026年3月2日(月)、第4回連携協定大学ネットワークフォーラム「連携協定大学との教職の魅力共創」を本学で開催しました。連携協定大学の関係者、本学教職大学院生、本学教職員あわせて19人が参加しました。

会に先立ち、野田敬敬学長から連携協定大学の関係者に、12月に開催した第2回「こどもまんなかシンポジウム」への協力に対する御礼が、真島聖子学長補佐(未来共創プラン担当)から次年度の同シンポジウムへの協力依頼がありました。

フォーラムでは、はじめに野田学長から開会のあいさつが述べられた後、第2回「こどもまんなかシンポジウム」の動画を視聴しました。

シンポジウムに参加した本学の教職大学院生からは、「私は、研修校で授業する時など、場の雰囲気作りを大切にしている。コロナ禍を経験しているからこそ、対面で活動することの大切さを改めて感じた。今回、現職教員である教職大学院生は、教師目線ではなく、共に学ぶ院生として、ファシリテーターをしたので、子どもたちとの対話が弾んだ」、「児童・生徒と一緒にすごろくを通じて、どんどん話が広がり、学ぶことのおもしろさを共有することができた」という感想が述べられました。また、連携協定大学の関係者からは、「小・中・高・大学など様々な児童・生徒・学生から意見を聞くことができて良かった。答えは子どもたちの中にあると感じた」、「子どもたちは、給食のメニューに肉汁ハンバーグがあるといいなど、ちょっとしたことが学校へ行くモチベーションになる



あいさつをする野田敬敬学長



シンポジウムの動画を視聴



感想を話す教職大学院生



次回シンポジウムに関する意見交換

ことがわかった。このような体験の場を引き続き設定してほしい」などの要望が述べられました。次に、次回シンポジウムの企画について、どのような学生に参加してもらえるとよいか、各大学の良さを引き出すようなワークショップをどのように行うか等について活発な意見交換が行われました。

休憩をはさんで、真島学長補佐から、「東海地域の教員養成を共に創る大学間ネットワークと連携教職課程」について説明があり、その後、参加者はグループに分かれ、連携協定大学間の



真島学長補佐による説明

今後の連携の在り方などについてグループディスカッションを行いました。ディスカッションでは、「基幹教員制度を活用して



グループディスカッションの様子

クロスアポイントメントを進めたい」、「特別支援に関する実習先が少ないので、特別支援学級等でも実習ができるとうい」、「就職活動においてGPAが採用基準となっているため、教職課程の履修をやめてしまう学生がいる。各大学でGPAの算出方法に工夫が必要なのではないか」などの意見が挙げられ、最後に野田学長からの閉会のあいさつで本フォーラムを締めくくりました。



全体交流の様子

フォーラム終了後のアンケートでは、「第2回『こどもまんなかシンポジウム』には教員として現場に立つ予定の4年生が参加したが、次回はこれから教員としての意識を高めていく段階の2年生の参加を促して、他大学や子どもたちから刺激をもらってほしい」、「教職の魅力を発信するため、紹介された動画コンテンツなどを自大学でも学生に紹介していきたい」などの感想が寄せられました。

今後も教職課程を有する他大学と連携しながら、教職大学院を核としたネットワークの構築を推進してまいります。





## 岡崎女子大学を職員が訪問し、教職大学院説明会を実施

6月12日(金)と7月10日(金)に、教職大学院の事務を担当する職員が、連携協定大学の一つである岡崎女子大学を訪問し、教職大学院説明会を実施しました。この取り組みは、昨年度岡崎女子大学から提案いただいて実現したもので、昨年度に引き続き2度目の実施でした。

岡崎女子大学子ども教育学部で教職を志す1~4年生を対象に、教職大学院で学ぶことの制度的なメリットや本学教職大学院の特色について説明しました。大学卒業後に、教職大学院で実践的な学びをさらに深めてから、教職に就くという選択肢もあることについて紹介し、参加した学生は熱心に耳を傾けていました。

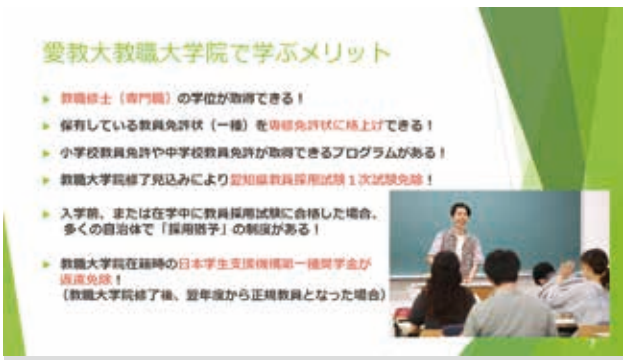
参加した学生の中には、まだ2年生や3年生でありながら、すでに本学教職大学院への進学を検討している学生も複数名おり、意識の高さを感じました。説明会終了後には、個別にお話しすることもでき、大変貴重な機会となりました。



教職大学院説明会の様子



説明会資料①



説明会資料②

## 中部大学 及び 名古屋学芸大学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結

9月22日(月)に中部大学と、9月25日(木)に名古屋学芸大学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結しました。この協定の目的は、「本学大学院への受験・入学を希望し協定締結大学に在籍する教員を志す学生を対象として、本学大学院教育学研究科専門職学位課程(教職大学院)において、教育実践力を備えた高度専門職業人としての教員の養成を行うこと」です。今まで

に同様の協定を福山女学園大学、愛知東邦大学、鈴鹿大学、愛知淑徳大学、愛知大学、岡崎女子大学、南山大学、中京大学、東海学園大学、中部学院大学、岐阜協立大学、金城学院大学と締結しており、中部大学及び名古屋学芸大学との締結で合計14大学となりました。



中部大学との締結式



名古屋学芸大学との締結式

## 野田学長のつぶやき

2025年度は、9月に中部大学及び名古屋学芸大学と新たに連携協定を締結し、連携協定大学は14大学となりました。中部大学との協定締結の様子は、新聞にも大きく取り上げられました。この教員養成の高度化に関する連携協定は、各大学の教職課程で教員免許状を取得した学生が、さらなる高度化を図るため本学教職大学院へ進学することを視野に入れたものです。第2回「こどもまんなかシンポジウム」にも、多くの大学から参加があり、連携の広がりを実感しました。





## あとがき

本報告書は、2025年度の「未来共創プラン」の取り組みについて、巻頭の特集ページを掲載し、戦略ごとに主な内容をまとめました。5年目を迎える「未来共創プラン」は、学内外の多くの皆様から力強いご支援とご協力を賜り、幅広い年齢層の皆様と地域・国境を越えて共創することができました。関係者一同、心より感謝申し上げます。

### 未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2025

2025年度、新たに重点的に取り組んだ内容は、「未来共創プラン戦略連携型プロジェクト」の推進です。戦略3、7、9を有機的に連携させて、「未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2025」として、12月13日(土)に、第2回「こどもまんなかシンポジウム—教職と教育支援職の魅力再発見!—」を開催しました。

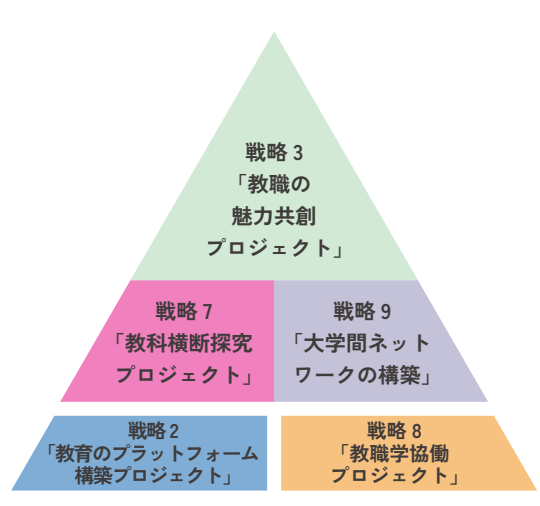
「未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2025」では、戦略3を中核に位置づけてプラットフォームとし、そこに、戦略7、9が連携する形で構造化しました。

戦略7では、同シンポジウムのワークショップの企画・運営を教科横断探究コースの学生が担うことで、子どもたちの声を受けとめながら、理想の学校について考え、話し合いました。戦略9では、「東海・信州国立大学連携プラットフォーム(C<sup>2</sup>-FRONTS)人口激減期における持続可能な教員養成タスクフォース参加大学」である信州大学と静岡大学から講師を招くとともに、本学と教員養成の高度化に関する連携協定を締結している私立大学の学生がワークショップの運営に参加しました。戦略3を中核に、戦略7、9を有機的に連携させ、構造化することで、相乗効果が生まれ、よりよい未来の教育について考える場となりました。

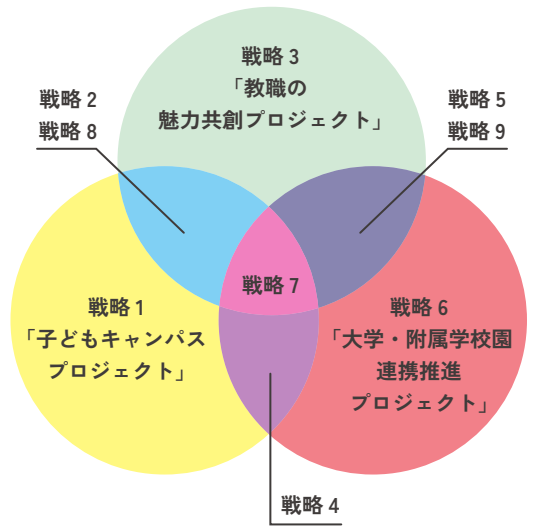
また、プロジェクトの下支えとして、戦略2では、株式会社キャッチネットワークと連携して、同シンポジウムの動画制作とニュース番組の配信を行い、教職と教育支援職の魅力を地域社会と共有しました。さらに戦略8では、教職課程と教育支援課程の学生が同シンポジウムのワークショップに関するアイデアを考え、参加することを通して、それぞれの立場での学びや協力体制の在り方について考えを交流し、教職と教育支援職の理解を深めました。

### 未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2026

2026年度は、戦略1「子どもキャンパスプロジェクト」と戦略3「教職の魅力共創プロジェクト」と戦略6「大学・附属学校園連携推進プロジェクト」の3つを中核に位置付け、各戦略を有機的に連携させて構造化した「未来共創プラン戦略連携プロジェクト 2026」を推進します。



未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2025 イメージ



未来共創プラン戦略連携型プロジェクト 2026 イメージ

2026年度は、共創の場を創出することに加え、それぞれの活動を研究的視点で捉え直し、研究成果として発信することに力をいれていきます。

これからも、よりよい教育の未来を共創する場づくりを通して、教育研究を活性化させ、共感の輪を広げたいと思います。

真島 聖子 (未来共創プラン担当学長補佐)





# 愛知教育大学未来共創プラン 2025

- 監修
- 野田 敦敬  
(愛知教育大学 学長)
  - 小塚 良孝  
(愛知教育大学 副学長 カリキュラム改革・国際交流・未来共創担当)
  - 真島 聖子  
(愛知教育大学 学長補佐 未来共創プラン担当)

- 担当課
- 企画課 未来共創推進室 戦略 1
  - 学術研究支援課 戦略 2、戦略 3
  - 国際企画課 戦略 4
  - 附属学校課 戦略 5、戦略 6
  - 教務企画課 戦略 7、戦略 9
  - 企画課 戦略 8

- デザイン
- 企画課 未来共創推進室

- 愛知教育大学  
未来共創プラン  
2025
- 2026年3月31日発行
  - 監修 野田敦敬・小塚良孝・真島聖子
  - 発行 国立大学法人愛知教育大学

- 印刷
- ツゲ印刷株式会社



# 未来の教育を共に創る

## 愛知教育大学が目指す姿

- 子どもの声が聞こえるキャンパス
- 地域から頼られる大学

未来共創プランのHPに  
ぜひ遊びに来てください。



愛知教育大学の  
YouTubeチャンネルに  
未来共創プランの動画も  
たくさんあります。



国立大学法人  
**愛知教育大学**  
AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

〒448-8542  
愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1  
<https://www.aichi-edu.ac.jp/>